

年頭所感 その二

その二では宗門と（檀）信徒について申し上げたいと思います。これから宗門と檀信徒はどうなっていくのかについて縷々持論を述べさせていただきます。昨夜は悩める他寺院の檀信徒代表の方から相談依頼がありました。それに対して私は次のようにお答えしました。当該寺院の諸問題について取り急ぎ拝読いたしました。一言でいえばお寺とは何か。お寺は誰のものなか。住職とは、檀家（門徒）とは、檀信徒とは何なのか。檀家制度とは何か。これらを整理することが重要かと思えます。そしてさらに言わせていただきますとお寺と檀家の関係はこの令和の時代に終わるということです。何も心配することはありません。それぞれが元に戻ればよいだけのことです。振り出しです。ご破算です。新たな時代の中で新たな関係を構築していけばよいのです。寺院は消滅の危機です。葬式仏教衰退 檀家制度崩壊 墓地運営全滅時代の生き残り方あるいは整理の方法を考えていけばよいだけのことです。キーワードは寺院は住職次第 住職次第ですべてが決まる。そんな時代になったということです。あとは自助努力 企業努力しかありません。と。

今月の月刊住職「新米住職のワーキングプア記4 1（苦勞を承知のうえで継いだ地方寺院がさらに困窮の度を増すなかで）」水月昭道さんの記事は示唆に富み今後の仏教寺院を考える上で極めて重要な指摘をされています。まさに目から鱗が落ちる思いで拝読いたしました。いま多くの僧侶たちはこれまであまりにも宗門や仏教会活動 檀信徒法務に精を出しすぎてしまったために寺院は破綻寸前 当人は狼狽という憂うべき深刻な事態にあります。ひと言で言えば何の役にも立ってはいなかったということです。私も反省しているひとりです。儀礼とパフォーマンスだけで飯を食ってきたつけが回ってきているにすぎません。よく世間一般の人たちからお坊さんから浮世離れした法力や清涼感を感じないという声を耳にすることがあります。水月氏が指摘するようにやれ教区会だ、宗務所行事、役員総代会、婦人会、市県の仏教会、現職研修会、布教会、研修旅行、人権学習会、等々毎日のように住職、副住職は駆り出されます。いまコロナ禍でいずれもが中止となって安堵している人たちが相当数いるといわれています。宗門の会合と言えばいずれも飲みニケーションばかり。話題と言えばゴルフ、お酒、女性の話ばかりですからそこには何の意味もありません。当該教区会議も毎月開催されていましたが内容は何もありませんでした。ただの時間潰しです。総代役員会も私が一週間もかけて膨大な資料を用意し2時間にもわたるプレゼンテーションをおこなっても結果的には散々でしたので随分と以前にやめてしまいました。それにより住職の号令のもと朝令暮改でもって一気呵成の改革を進めた結果いまや向かうところ敵なしです。宗門とも旧檀家抵抗勢力ともさんざんやりあった結果 いま

は權益を勝ち取りすべては上手く機能しております。感謝感謝の毎日です。心配なことと言えば抵抗勢力としてご活躍をいただいた人たちが病に倒れ脳梗塞などの難病におかされていることです。一刻も早く回復されることを願うばかりです。

次にこれからの信徒対応ですが承諾書の提出をされていなくとも日頃より当該寺院に対して協力的な人。法事や寄付などをよくされている場合は出来るだけ私がおつとめさせていただきます。私に対する態度如何で判断をさせていただきます。恩赦という意味合いもあります。その後反省をされた方も多く住職との関係を良好にしたい人が多いやに聞き及んでおります。後悔をしている人たちを許していくことも住職 宗教者の大切な責務かと思量します。近隣寺院ともご支持をいただければ関係改善もやぶさかではないのが本音です。理想的な僧侶像とは慈悲の心を体現し菩薩行を営んでいくほかに道はありません。やはり最後はノーサイド。同行者です。

年頭にあたり及ばずながら開祖道元禅師の「正法眼蔵」現成公案の一節を引用し私訳をさせていただきます。

自己をはこびて万法を修証するを迷とす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり。迷を大悟するは諸仏なり。悟に大迷なるは衆生なり。さらに悟上に得悟する漢あり。迷中又迷の漢あり。

諸仏のまさしく諸仏なるときは、自己は諸仏なりと覚知することをもちいず。しかあれども証仏なり、仏を証してもてゆく。心身を挙して色を見取し、心身を挙して声を聴取するに、したしく会取すれども、かがみに影をやどすがごとくにあらず、水と月とのごとくにあらず。一方を証するときは一方はくらし。

(私訳) 自らを動員してすべての真実を悟ろうとすることは迷いである。すべての真実の方からきて自らを悟り気づかせることは悟りである。迷いを大いに悟ったのが仏たちである。悟りにありながら大いに迷っているのが凡夫である。さらに悟った上に悟るものもいるのである。迷いの中にあってもまた迷うものもいるのである。

仏たちがまさに仏たちになるとき自らは仏たちなどとは思わないのである。それこそが悟った仏たちなのである。仏を悟っていくということである。身とところでもってものを見たり、身とところでもって声を聴けていても鏡に影がうつるようにはいかないのである。水面に映る月のようにはいかないのである。一方を悟れば一方は見えないのである。

令和3年1月3日 (当院住職)